

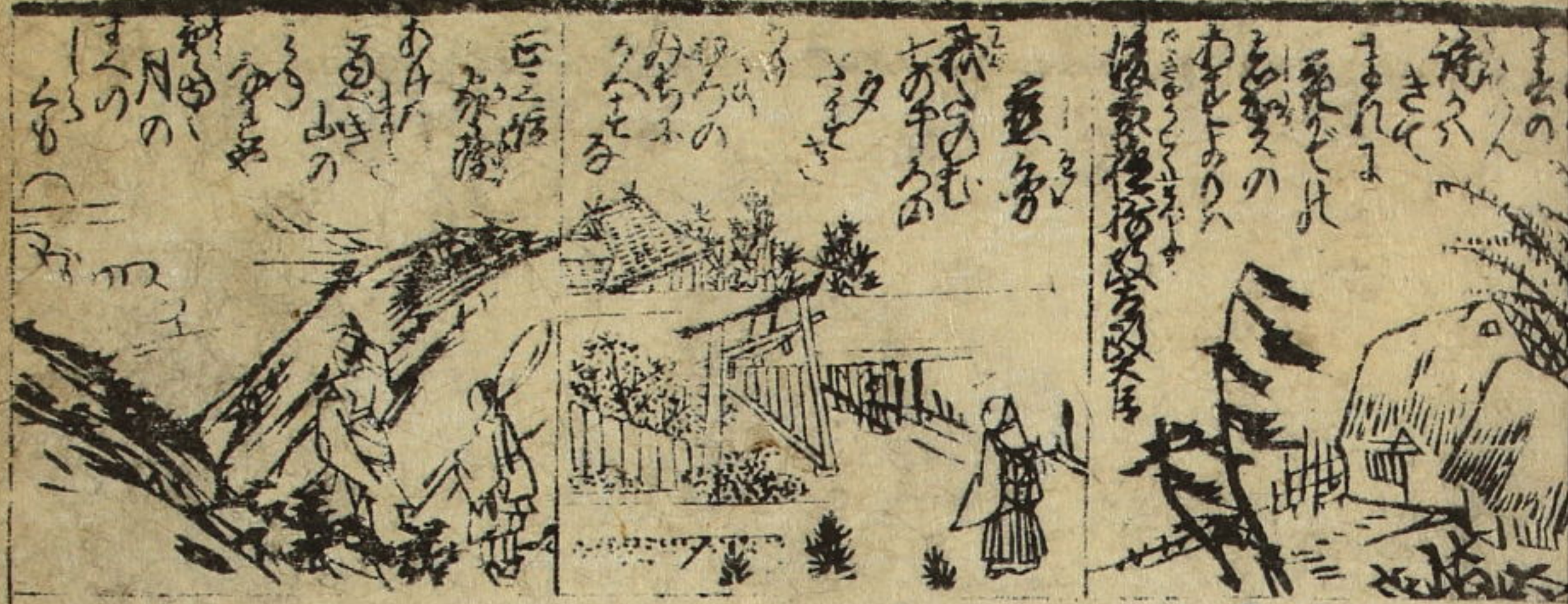


縁百人首
増獲

天智天皇
秋の田
月夜の
席の若



山野井



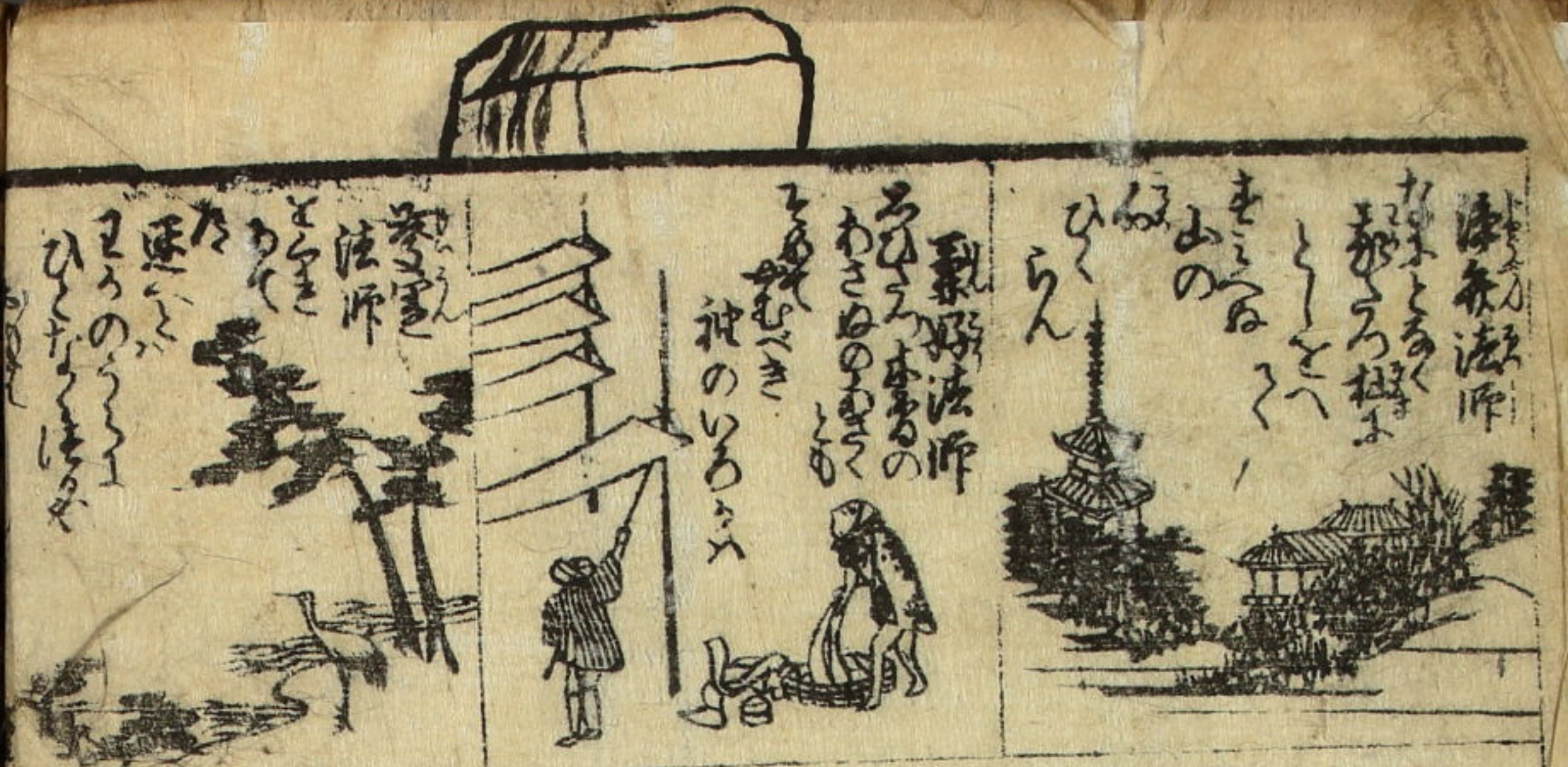
ひろ
 かの
 なる
 の
 ぐり
 乃
 梅
 乃
 九



持
 乃
 乃
 乃
 乃
 乃
 乃
 乃



海老法師
 山の上
 神のつらみ
 海老法師
 山の上
 神のつらみ
 海老法師
 山の上
 神のつらみ

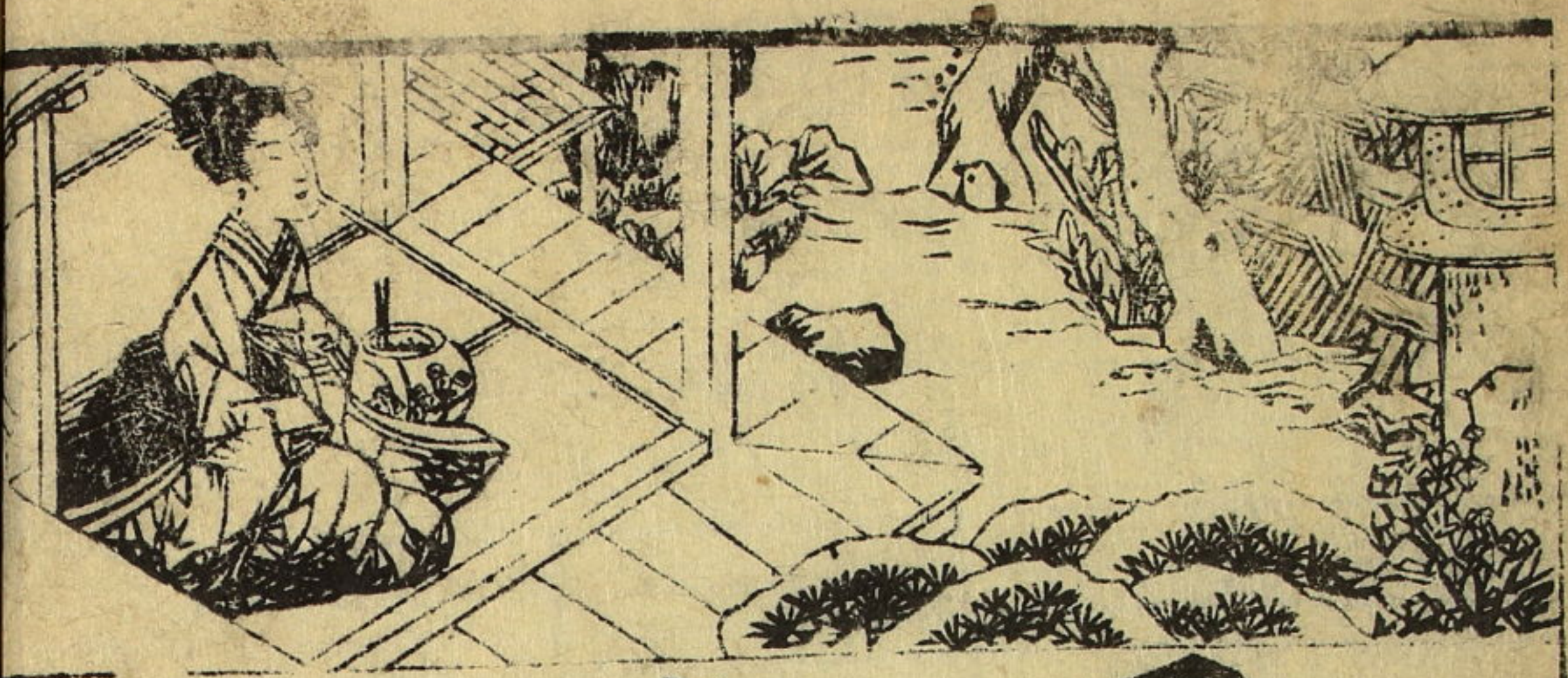


海老法師
 山の上
 神のつらみ
 海老法師
 山の上
 神のつらみ



中判書
 海老法師
 山の上
 神のつらみ





正月七日 二月三日
 八月五日 七月七日
 九月九日

右の月日とみしるやと
 りり正月七日と人目と
 りいて七種の粥と夜と
 りと清く入り下りて
 りるまを七種の粥と
 りて入るはるあり
 こまを飯まはる病と
 のとき粥をまはる
 とすなり
 七種の粥とあるあり
 芥子あり
 煮るをこころの丹
 まはるすしあり
 七種の粥

借心通眼

まはる勢

まはる

まはる

まはる

まはる

まはる



陽気院

飛波想

まはる

まはる

まはる

まはる

まはる



今氏儀をたがひ一掃を
 いたつてつとて第七日以後
 るいぢを更さうもあがる
 とりくべし一掃をたがひ
 山崎の全所善哉池の
 毛より十長はらうとりの
 百軒はせうとすまをとりて
 〇二月三日とて己と云
 曲のの高とのりて松漢
 とも古果あるのり今
 系の解とれえの善哉
 りもむかといわくハ前
 箱草をそはけりけり
 ちかひは日とまどりのり
 比と祖をむかひありと見
 合まきまは百病とのも

く流りて流のまき
 頃慶の浦ま三月己の
 日後さあある源
 けり不春しく元元
 是と頃との後とりり
 今の歌あそひの後の具
 たり矢とのどくち
 後へ流る流神のをま
 るふ一浪流神のい
 長名の命とりて二橋
 の流神と流あつて合
 せぬひ日本医師の初
 るり別山城の全天際
 の天神くも流る
 流神とは一神の流神
 るり流神のはまどく
 ともむかひありとま

河東友左衛門

陸奥の

志のぶ

ともち

後

ともち

ともち

ともち



志のぶ

ともち

ともち

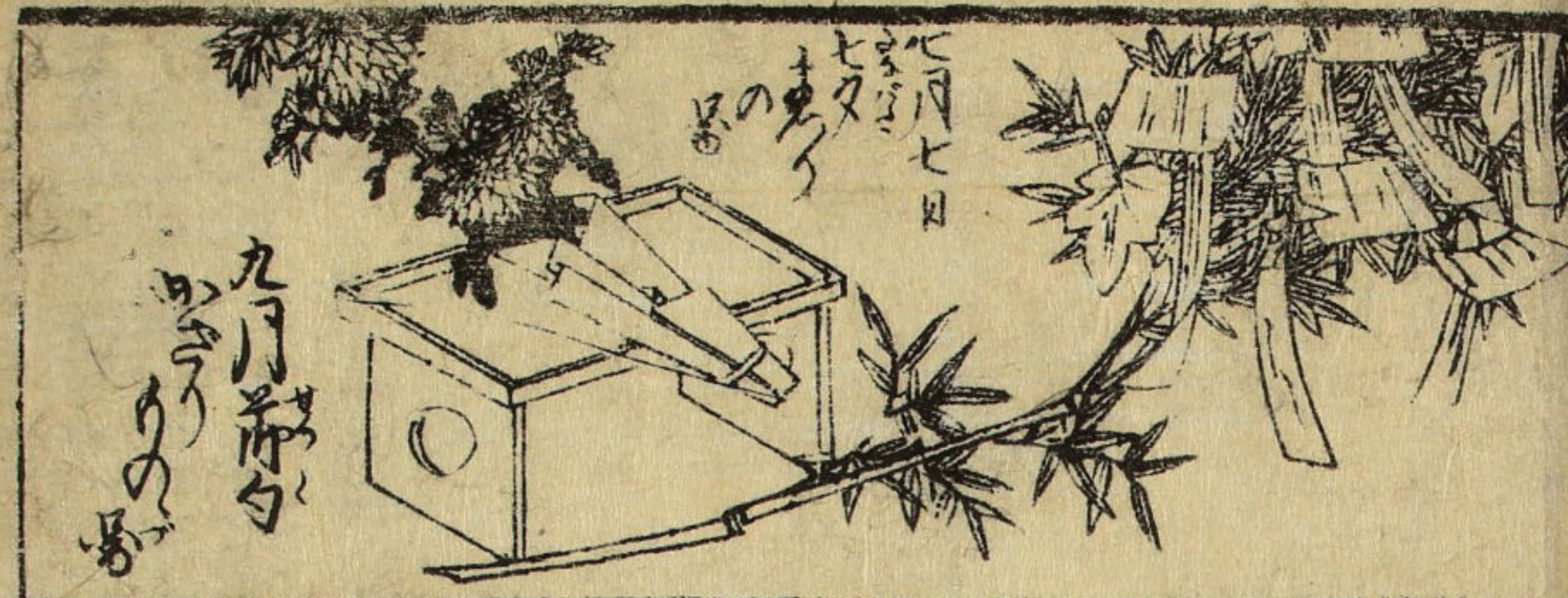
ともち

ともち

ともち

ともち





九月廿九日
の
日

七月七日
の
日

いふに今日菊の酒を
のめば長きまきの酒
を飲めば人となりあ
またもあしあきとの
ふまもあしあきとの
さういふ酒を飲む
といふ人あはれま
重きを飲めば文正月
終日と元をもとに
せもりのり年の始
のふもりのりの始
おのれいふに酒は
後ふたり
八月朔日と八朔
のふもりのり酒
そのふもりのり酒
秋の田のふもりのり



名
三
人
弟



菅家
の
高
山
の
死

被			入	文
被	身	身	入	文
			切	



文			
文			
被	文		
被	文		



○男が女をたふすは子
 のまことも育むべし
 のうちを知らぬもの
 べし
 ○男が女をたふすは子
 ありては育むべし
 育むべし
 ○男が女をたふすは子
 育むべし
 育むべし
 ○男が女をたふすは子
 育むべし
 育むべし
 ○男が女をたふすは子
 育むべし
 育むべし
 ○男が女をたふすは子
 育むべし
 育むべし

○男が女をたふすは子
 のまことも育むべし
 のうちを知らぬもの
 べし
 ○男が女をたふすは子
 ありては育むべし
 育むべし
 ○男が女をたふすは子
 育むべし
 育むべし
 ○男が女をたふすは子
 育むべし
 育むべし
 ○男が女をたふすは子
 育むべし
 育むべし
 ○男が女をたふすは子
 育むべし
 育むべし

藤原義孝

あがらあ

おのりし

命

かみ

たのしみ

可奈



藤原義孝

あがらあ

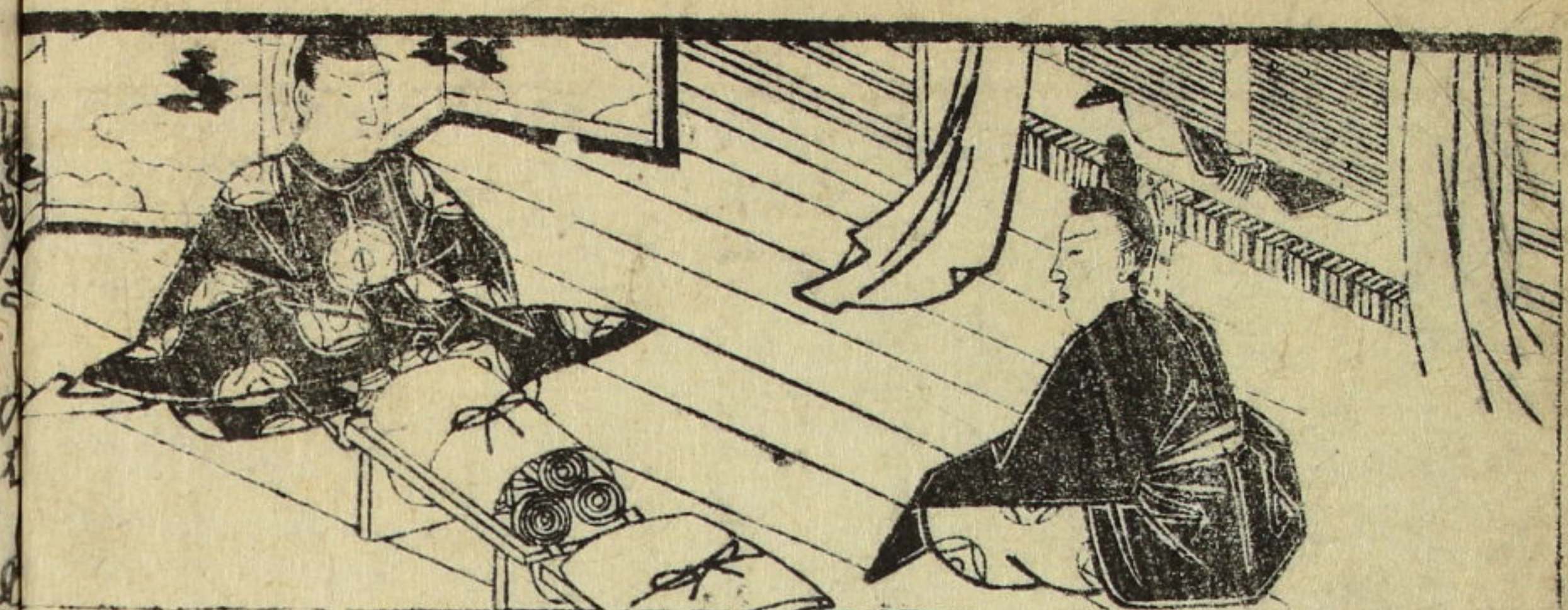
おのりし

命

かみ

たのしみ





いふ女の隠るべ
 男子も等あはれ
 入親類もさへ
 ○松竹と云ふ歌の
 針金の針は死を
 飛りて袴を日本
 らは流天運六車油
 門親戚松竹とつら
 帝皇をまゝて縁布
 縁とあつるとなり
 ○藤原と殿の侍は
 死意の皇の御衣を
 て箱とす一箱ふら
 くととり又奉
 の代も落ると日中
 五の徳代末の徳代

後同二頁母

忘れられ

好末

あはれ

今日を

命とす

うらやま

大蛇言はれ

流乃おや

久く

あり

名は

於て

は



小うらりて武成の中
 授きとこの二成りたる
 巾のひろたをよせし
 ありありとけむまび
 中まう入時くふるま
 女室のころまをて
 けこのごころけく
 むとびはとさうま
 とくもんをさうま
 一かそのち下村
 どのか方兼好の
 常のむとびさう
 風ふらふさうま
 下中兼好の所
 武成がごころ
 今うまへさうま

この二成りたる
 授きとこの二成りたる
 巾のひろたをよせし
 ありありとけむまび
 中まう入時くふるま
 女室のころまをて
 けこのごころけく
 むとびはとさうま
 とくもんをさうま
 一かそのち下村
 どのか方兼好の
 常のむとびさう
 風ふらふさうま
 下中兼好の所
 武成がごころ
 今うまへさうま

百人

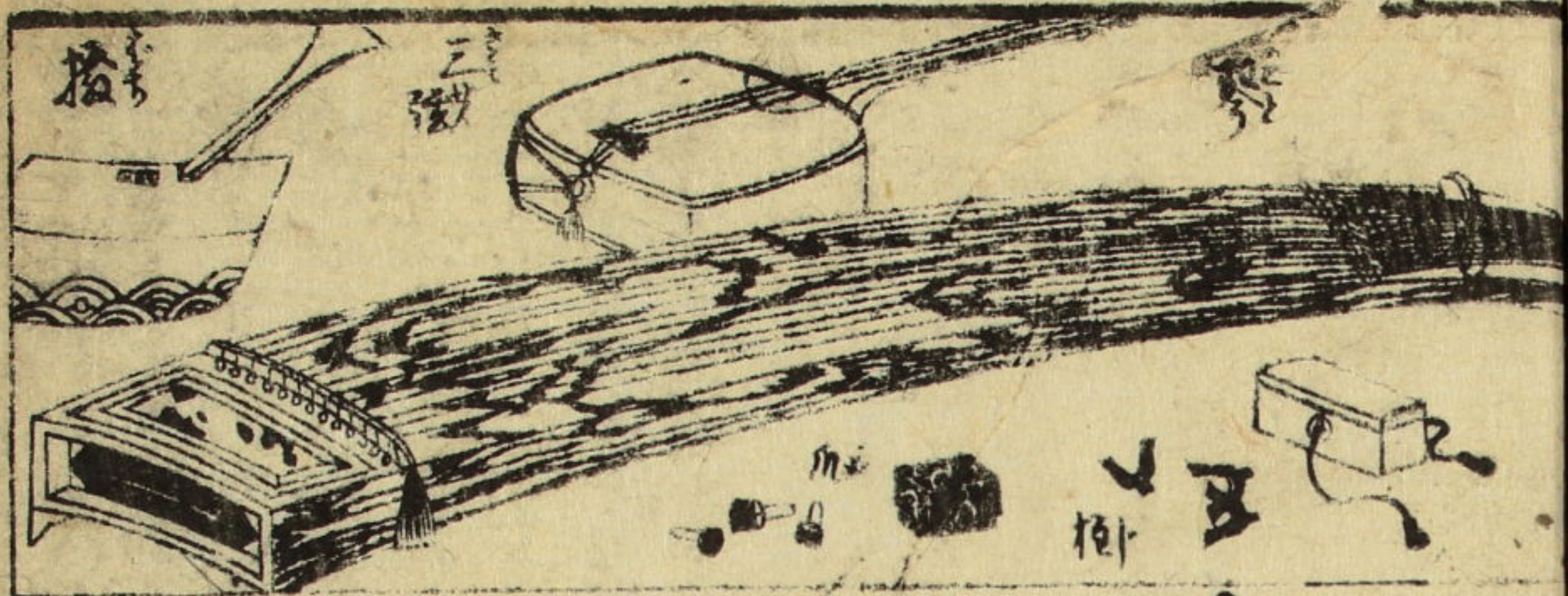
ありまやま
 有る山
 さうま
 乃
 風かび
 いでたま
 人成
 武成
 大武成
 赤澤場
 神さま
 のを
 小
 月と
 みくれ



ありまやま
 有る山
 さうま
 乃
 風かび
 いでたま
 人成
 武成
 大武成
 赤澤場
 神さま
 のを
 小
 月と
 みくれ



世二



○琴の神代よりありて
 大己貴命天根琴を
 持てて神代より六法
 添て神樂をなす
 今利由り琴のありて
 筆なりありて
 神農琴と云ふ
 桐の本を削りて
 弦とてありて
 琴の文とてありて
 筆の象の象
 天の清字命
 の子流は
 唐人の曲と
 て天

わらわら乃吹
 山は
 お茶
 川の
 あり

A woodblock-style illustration of a man in traditional Japanese clothing, sitting on the floor. He is wearing a white robe with a dark sash and a white head covering. He is looking towards the right. The background is a simple patterned floor.

三條院
 公
 うき
 世
 こと
 お

A woodblock-style illustration of a woman in traditional Japanese clothing, sitting on the floor. She is wearing a patterned robe with a dark sash and a white head covering. She is looking towards the left. The background is a simple patterned floor.



幸の倍法水といふ人
 妙なるてはるるを
 八指換換まつてえいよ
 り三弦合せ備束と
 るりくるなりはなま筆
 を籠いよまてしとて
 知十二強なり束の奏
 むりふより一二三に
 角ふる十一をさるい
 二をいといふ十二をま
 りまなり
 ○三弦い永源年中流
 疎玉よりつるその
 胸の指の皮を流るる
 家たの育人か
 りかめの子供り虎派
 といふ同人かを被ま

良選法師
 さび
 者
 乃
 大納言輝伝
 夕
 門田乃
 稻葉
 若
 煉
 娘





あつひ落しをなす
 ○つぎが六風さんま
 平御 於不て候の
 不ぬり又白粉洞泥丹丸
 をまき粉りてぬるもゆ
 ○やけとまの 杜原美苑
 てこ平て候てつげ
 又水あつた又滑るはゆ
 あり 美苑さんま
 ○ぬらまじりあけけの
 ぶあの花美さんま
 渡りま
 ○むらりあつたあつて
 ねえ終り政のまじり
 付らぬなり
 ○終のまじり ころ
 ぶあ ころまじり 終り

みきりとのまじり
深兼昌

あつちつ

ちりよ
 の

あつちつ

あつちつ
 の

あつちつ
 の



たまき
たまき

あつちつ
 の

あつちつ
 の

あつちつ
 の

あつちつ
 の

あつちつ
 の

あつちつ
 の



百人

相

白ひ袋の法

寝孔髪の方

耳松 一五 木香 一五

麝香 一五 白胆 一五

丁香 一五 阿膠 一五

安息香 一五 硫磺 一五

樟腦 一五 茴香 一五

春風の方

丁香 一五 麝香 一五

沈香 一五

麝香 一五

丁香 一五 耳松 一五

茴香 一五 白胆 一五

麝香 一五

丁香 一五 耳松 一五

深抄和竹

○五子と白朮を夏

汁とて洗すなり

○煎美いろへ下地を

系色小くわやせよ

て二三人洗しあや

ゆかすりの汁を

いきて洗すなり

○ちぢみおろし下地を

うこんを洗うへお

とやくすなり

○兼洗ひり洗すなり

洗すなり

ろくろを洗すなり

くへり洗すなり

あやし洗すなり

たごの洗すなり

道周法所

易ひ徒

命

命

命

命

命



皇太后

皇太后

皇太后

皇太后

皇太后

皇太后

皇太后



○丁子糖なり皮の汁
 で二人をあらわひさ
 ぎの汁一へんはたり
 ○煮るにあらわひさ
 ぎの灰汁を入ぐい
 ー入て煮るにたり
 むすたれを煮る
 ○他せ煮るにたり
 せん下糖をあらわたり
 がをあらわたり
 煮る
 ○他せ煮るにたり
 せん下糖をあらわたり
 小糖をいきて煮る
 ○あらわたり
 りのあらわたり
 と二へんけうのあらわ

○煮るにたり
 の汁をあらわたり
 りの汁をあらわたり
 ぐいをあらわたり
 ○他せ煮るにたり
 せん下糖をあらわたり
 小糖をいきて煮る
 ○あらわたり
 りのあらわたり
 と二へんけうのあらわ

あぢいこのまじり
 養老湯獨初長

今
 う
 志の
 此
 今
 う
 志の
 此
 今
 う
 志の
 此



後
 明
 夜
 後
 明
 夜

後
 明
 夜
 後
 明
 夜
 後
 明
 夜



ところを移し...
 夏...
 又夏...
 ○み...
 ○...
 ○...
 ○...

今川...
 何の...
 女の...
 一...
 一...
 一...
 一...

色行法師

月...
 思...
 秋...
 秋...



窪窪法師

村...
 核...
 煙...
 煙...



一夜に道真さまの
 藩をこぼし、けし
 刀をさす
 一歩も嫌も流あると
 と赤くを乳過と好
 む事
 人の罪とあげて
 智あつとあつと
 出る沙門小対めん
 走といふとも例をく
 別了事
 我を隙を知りま
 我ハ橋或ハ石足の
 まどむはひま
 一のくさるの
 男が小藤末の
 人の浅くともあ
 怪し小藤うりて
 化人の頼りを知り
 事
 男が新中継を
 さ釈教うりた
 とこひま
 道とる人
 小藤小友と
 事
 一人あつ内
 小藤を

一般の流大福

月をさる
 ぶまの
 海士の
 神ごめ
 ぬまごめ
 色六
 いろぬれ



海士流大福

きりごめ
 ぬまごめ
 先



福心

命のつらさのつらさ
 憂へるはたかぬは
 形なきはあふくそ
 智ある人ふ深ま
 へ一息を絶て
 死んと思ふは人の
 種ふるふを思ひ
 思ふは一息を絶
 ちてはあふくそ
 うつらさのつらさ
 人とあはれは日月の
 影本まよとて
 のまよふは思ひ
 思ふは思ひ

命のつらさのつらさ
 憂へるはたかぬは
 形なきはあふくそ
 智ある人ふ深ま
 へ一息を絶て
 死んと思ふは人の
 種ふるふを思ひ
 思ふは一息を絶
 ちてはあふくそ
 うつらさのつらさ
 人とあはれは日月の
 影本まよとて
 のまよふは思ひ
 思ふは思ひ

命のつらさのつらさ
 憂へるはたかぬは
 形なきはあふくそ
 智ある人ふ深ま
 へ一息を絶て
 死んと思ふは人の
 種ふるふを思ひ
 思ふは一息を絶
 ちてはあふくそ
 うつらさのつらさ
 人とあはれは日月の
 影本まよとて
 のまよふは思ひ
 思ふは思ひ

命のつらさのつらさ
 憂へるはたかぬは
 形なきはあふくそ
 智ある人ふ深ま
 へ一息を絶て
 死んと思ふは人の
 種ふるふを思ひ
 思ふは一息を絶
 ちてはあふくそ
 うつらさのつらさ
 人とあはれは日月の
 影本まよとて
 のまよふは思ひ
 思ふは思ひ

命のつらさのつらさ
 憂へるはたかぬは
 形なきはあふくそ
 智ある人ふ深ま
 へ一息を絶て
 死んと思ふは人の
 種ふるふを思ひ
 思ふは一息を絶
 ちてはあふくそ
 うつらさのつらさ
 人とあはれは日月の
 影本まよとて
 のまよふは思ひ
 思ふは思ひ



